

研修報告書 No 45

研修施設： 本山町立嶺北中央病院
いの町立国保長沢診療所
東京大学医学部附属病院 研修医

東京大学医学部附属病院の初期研修プログラムの一環で、高知県の山間部、本山町にある嶺北中央病院で1ヶ月間の地域医療研修を行ってきました。

もともと、四国の出身なので、自分の生まれ育った地域に近い所の医療がどのような実態であるのかを見たいと思い、高知県での研修を選びました。

嶺北中央病院は地域の中核病院であり、外注になる検査が多かったり、専門科の受診が週に1回だったり、東京や高知市内の総合病院に比べるとやはり、より専門的な医療へのアクセスが難しい部分があることを実感しました。しかし、CTやMRI、内視鏡などの医療機器もそろっており、臨床経験の豊富な先生方が、重症例も含めて **primary** な医療を担っているという印象でした。その中で、やはり患者年齢が高いことは印象的でした。疾患の頻度としても肺炎や心不全といった加齢の影響のある疾患が多かったように思います。

嶺北中央病院での研修に加えて、地域の診療所やグループホームなどへの出張診療にも同行させていただきました。地域の診療所は常勤の医師がおらず、月に一回の出張診療のみの所もあり、その道中の山道を含め、過酷さは想像していた以上でした。もちろんコンビニやスーパーといったものは近くにはなく、険しい山道を下っていかないと買い物もできないような地域で、やはり人口も減る一方だという話を伺いました。また、出張診療に伺った際には「〇〇さんは風邪気味で家で休んでいるから出てこられてない」とか「××さんは町の病院に入院しているからいない」といったことが多く、印象的でした。そういった地域では医療はその場で疾患の治療を行うというよりも、健康状態を確認したり、地域の人が一になつてしまわないように集まる機会を作ったり、というような性格が強いように感じました。診療所を受診する患者さんのほとんどは、高血圧や脂質異常症などの生活習慣病に罹患しており、このような、医療へのアクセスが難しい環境でこそ予防が重要であると感じました。

今回の研修で、このような環境を伝聞ではなく実際に目にすることができたことは大きな経験になったと思います。医療と一言で言っても、大学病院での専門性の高い医療と地域医療では求められるものが全く異なっていることを実際に体感しました。例えば、糖尿病に対しては厳格な血糖コントロールが望ましいですが、診療所が月に1回で、歩いて30分かかかるような所で一人暮らしをしている患者さんに、経口血糖降下薬はリスクが高すぎるかもしれません。実際に、このような患者さんの環境を鑑みた処方が多いように感じました。

今後、僕自身がどのような環境で医療に従事していくかはわかりませんが、すべて画一的に考えるのではなく、一人一人の患者とその環境に必要なことを考え、提案して行くことが重要だと思いました。

また、大学病院での研修では、ともすれば患者さんとの関わりも淡々と過ぎて行きそうな

中で、一人一人の患者さんとより近い距離で、人と人の関わりであるという医療の本質を経験できたことも大きかったと思います。

最後になりましたが、1ヶ月という短い期間でしたが、暖かく迎えていただき、いろいろご指導いただきました先生方、看護師の皆さん、スタッフのみなさん、ありがとうございました。